

子どもの安心基地になるために ～アタッチメントとは～

講師

北川 恵（甲南大学文学部教授・臨床心理士）

1. アタッチメントとは

アタッチメントと言う言葉は誤解が多く、時々、愛情という言葉と近い使われ方をしていることがあります。例えば、親子が見つめ合って、微笑んでいる様子を見て「いい愛着がありますね」ということがあります。これは愛情という言葉に置き換え可能です。また、親が自分の子どもに「とても愛着がある」と言うこともありますが、この言い方よりは「とても愛情がある」というほうがいいでしょう。このようにアタッチメントは、愛情という言葉と近い意味で使われることがありますが、本来は人が本能的に持っている基本的欲求のことで、食欲、睡眠欲などと同様でそれがないと生きていけないものをいいます。危険や怖い状況から安心を求める時の欲求として表れ、恐れを調整する時に必要とします。子どもはそのような場面での対処能力が限られ、特に小さい子どもは自分では恐れを調整できないために、怖いと感じた時に強くて大きい大人にくっつきたいという気持ちが高まります。人の赤ちゃんは生理的早産といわれ、最初の一年間は自ら歩いたり食べたりできない未熟な状態で産まれます。天敵が現れると強くて大きい大人に守ってもらい生き延びてきたため、こうした本能があるのです。

子どもは、血縁関係とは無関係に、普段、養育に責任を持ち自分の世話をしてくれる人（養育者）にくっつきます。アタッチメントの誤解の一つに、3歳までは母親が大事だと言われますが、アタッチメントに関して言えることは、普段世話をしてくれる人がアタッチメント対象であり、母親はもちろん父親や、保育者、教師、祖父母も対象です。親子間での愛情も大切ですが、このようにアタッチメントは、恐れを調整を目的とする、人の本能的で切実な欲求で、特に対処能力が低い子どもは、頼りにしている大人にくっつきたいという気持ち

ちで表現します。

（ビデオ視聴）

このビデオでは、一人で部屋に居る男の子（0歳児）が心細い気持ちで泣いていました。そこへ父親が帰ってきて、男の子は抱きあげて欲しいという動作（両手を前に出す）で要求します。父親が「大丈夫だよ」と声をかけながら抱き上げ慰めていて、まさにアタッチメントの典型的な場面です。次の場面で父親は男の子におもちゃを与え子どもを床に降ろします。しかし、不安そうに泣く男の子に気付く、再度、父親は慰めながら抱き上げます。

また、対処能力がなく見通しが持ちにくい子どもにとっては空腹や暑さ寒さなども恐れを喚起します。大人は空腹であっても自分で対処でき、見通しを持つことで対応できますが、赤ちゃんは切実に危機不安を感じ、このような状況に対して、声を出して泣く、ハイハイで近寄る、抱っこして欲しいと両手を前に出すなど、大人に近づくための行動でシグナルを出します。これをアタッチメント行動と言います。そして、大人が側に歩み寄り抱き上げることで、子どもは養育者にくっついて、危機不安を取り除いてもらえます。これがアタッチメントです。日本語では「愛着」と訳されていますが、日本語の愛着には、「慣れ親しんでいるものに特別な気持ちを持つこと」という意味合いがあり、例えば、「使っている物に愛着がわく」という使われ方をします。しかし、怖い時にその物にくっつきたいとは思いません。このように日本語の「愛着」と発達心理学の「アタッチメント」は少し意味合いが違い、あえてカタカナでアタッチメントと表し、現在、その意味を広く説明しているところです。もともとのアタッチメントの訳は単純にくっつく、付着するという意味で、愛情のような感情を表現する意味はありません。厳密

にいうと、不安な時にくっついて安心したいという本能をアタッチメントと呼び、愛情とは違います。しかし、愛情深いやり取りをしている親子の様子として、例えば、泣いている子どもにすぐに対応するなど、結果としてアタッチメントが上手くいっていることも多く、二つの言葉を混ぜて使っても支障がないこともあります。ところが、親が産後うつで子どもと関わるエネルギーが限られているような場合であれば、一緒に遊ぶことよりも、泣いている時などの関わりを優先し、アタッチメントの方を大切にすればいいと考えることができず、施設職員の方が、限られた人員の中で子どもたちへ向き合う時、楽しい活動よりも、子どもが辛い時にこそしっかりと寄り添って関わって欲しいという優先順位につながります。このように子どもに関わる時、アタッチメントと愛情と分けて考え、恐れや不安の調整であると知っておくことが大変重要です。

子どもは恐れが解消され大丈夫になれば大人にいつまでもくっついていくわけではありません。十分な安心感があれば好奇心や自分でやりたい気持ちを持って自ら環境に働きかけていきます。これを探索といいます。基本的に子どもは運動発達が進むと、いろいろなことに挑戦し、経験しながら発達が促されます。これには、ベースに心が大丈夫であるという安心感があることが大切です、これを、比喩表現を用いて「感情のコップ」で表現することがあります。感情のコップが満杯ならば、子どもたちはいろいろなことに挑戦でき、これが基本的な発達を促すことにつながります。逆にコップが空っぽでは何もできません。子どもは気持ちを満たしてもらうアタッチメントが大切であり、また探索をするということも大切で、この2つが子どもの発達を促す両輪の役割をします。どちらも大事な欲求で、怖い時はアタッチメント欲求が優先的になり、安心している時は探索欲求が優先され、シーソーのようなものであるという人もいます。これを分かりやすく示しているものとして「安心感の輪」の図があります。ここでは、著作権があり掲載を控えていますので、興味がある方は「サークル オブ セキュリティ (Circle of Security)」のホームページを検索し

ていただきますと世界中の様々な言語に訳された図をご覧になれます。使用許諾に従って図をダウンロードすることもできます。

安心感の輪の図について説明します。この図にはアタッチメントと探索が全て含まれており大変理解しやすくなっています。子どもにとっての養育者である父親、母親、先生などの大切な大人が、「両手」のイラストで表されています。子どもにとって、養育者は「安心の基地」です。養育者から安心感をもらって感情のコップがいっぱいになると、「いろいろなことをするから見ていてね」と、自分の興味に沿って「探索」を始めます。子どもは一人で探索しているわけではなく、探索中も安心の基地を頼りにしています。つまり、遊んでいる最中も父や母を見て確認し、「見守って」くれていると分かれば再び活動に向かうことができます。あるいは遊んでいて困ったことがあると、「手伝って」と大人に助けを求めます。「一緒に楽しんで」や「大好きって見てて」という欲求を向けることもあります。子どもにとっては、上手にできた時に褒めてもらうだけでなく、上手くいかない時にもほほえましく見てもらえる、自分のしていることや存在自体を愛おしく見つめてもらえることも子どもの自尊感情のベースになります。何かできたときに認めてもらうことは頑張ったことの手応えですが、上手くいかない時も愛しそうに見つめてもらえる経験は、自分の存在価値を感じ、自信の源になるといえます。

そして、子どもは、何か不安なことが起こると探索どころではなくなり帰ってきます。これがアタッチメントの状態です。養育者の存在は「安全な避難所」となり、「今行くから、おいでよと待っていて」という願いを持って帰ってきます。ここに逃げ込んだら、「きっと守ってもらえる」という願いを持ち、具体的には「守ってね、慰めてね、大好きって受け止めて、気持ちを落ち着かせてね」などの欲求をもって帰ってきます。そこで十分な安心感をもらい再び探索に向います。そして、疲れたり、不安になった時にはまた帰ってきて、また探索に向かうということを繰り返します。これが安心感の輪です。大丈夫なときは自分の興味がある活動に向かえ、大丈夫でないときはきちんと

大人を頼りにできることが、年齢と状況から想定される範囲内でスムーズに表れていることが大切です。輪の大きさには年齢や個人差もあり、慎重な子は小さく、積極的な子どもは大きくなりますが、どの輪も動きは同じです。

2. アタッチメントの問題と評価

アタッチメントは、人が持つ本能的欲求であり生涯にわたるものであり、子どもだけでなく大人も持っている欲求です。子どもは、親などの養育者がアタッチメント対象で、これは縦の関係ですが、アタッチメント対象は、大人になると、友達やパートナーなど横の関係になります。アタッチメントは生涯にわたる欲求ですが、特に子どもはアタッチメント欲求が切実になることが多く、日常の中でも眠い、空腹などのことでアタッチメント欲求が高まり、どうすればアタッチメント対象にくっつくことができるのかを学習しています。それがアタッチメント行動の個人差につながります。例えば先ほどのビデオの場面で、子どもが不安で泣いている時の父親の言葉かけが「男の子は泣くものではない」や「何を泣いているのか」「泣くほどのことではないだろう」などだった場合、子どもはこの対応を繰り返し経験すると、泣かなくなり平気な振りをするようになります。その方が「泣かなくて強い子だ」と言ってもらいアタッチメント対象の近くにいることができるからです。アタッチメント信号の最小化方略とも言われており、慰めを求めるシグナルを出さず、何食わぬ顔で知らんふりをする方略を身につけていきます。回避型アタッチメントと呼ばれるタイプです。もちろん、これは年齢と状況をふまえて考えることが必要で、年齢によっては一人であっても大丈夫なこともありますし、必要な時にはきちんと大人に助けを求めているかを判断しなければいけません。

また不安な時に、「それくらい大丈夫でしょ」と突き離されるかと思えば、「仕方ないな」と応じてもらうなど、子どもは自分が求めている時に親がどう応えてくれるかの見通しが分からないことを何度か経験すると、不安な時に強く訴えておかないと、いつ親に応じてもらえるか分からないと

考え、いつでも強く訴えるようになります。アタッチメント信号の最大化方略です。子どもはなかなか安心感が満たされず、探索にも向かえず、結果として親との分離不安を強く感じます。これがアンビバレント型アタッチメントと言われる子どもたちです。

私たちは子どものアタッチメントの特徴を知るには、不安な時、子どもが頼りにしている大人へどのように向かっていくのか、どのような行動をとるのかを見ます。例えば、園（所）の送迎の際、親と別れる時や再会する時の子どもの様子を見ることで、ひとりひとりのアタッチメントの特徴を知る手がかりにできると思います。

子どもは、複数いるアタッチメント対象に、母親にはこう関わると上手くいく、父親との関わる時はこうする、祖父母の場合はこうした行動が効果的に近づけるなど、それぞれの人ごとに接し方を学習して身につけています。それは子ども自身のアタッチメントの特徴ではなく、それぞれの関係の中でパターン化されたものと考えます。

続いて深刻なアタッチメントの問題についてお話しします。

不安な時に養育者に対して、抱っこを望んで両手を上げながら、足は後方に行こうとする子どもや、あるいは、くっついてすぐに離れようとしたり、じっと固まってしまう子どもなど、親の側に行きたいのか離れたいのか混乱していて、どちらなのか分からない子どもがいます。これらの子どもを詳しく調べたところ、この様子は被虐待児に多く、その6割にこれらの行動が見られました。たとえば親が子どもを叩いている状況での子どもの体験を想像してください。叩かれると怖いと感じ、アタッチメント欲求から親にくっつきたくなります。しかし、同時に、その恐怖の源が親でありそこから離れたいと思うのです。このように、同じ対象に同時に「くっつきたい」と「離れたい」の2つの欲求が高まり、子どもはなにも方略が立てられないという深刻な状態になります。

親が子どもを脅かす場合だけでなく、親自身が怯える場合も、同じような体験を子どもはすることになります。たとえば、親自身も生育史において辛い経験をしていることがあります。現在の自

分の子育てにおいて、幼少期に辛かったことをふと思い出して、親自身が怯えてしまうとしめます。子どもにとっては、頼りにしている親が何もできなくなっている状態は非常に怖く感じ、安心感を得る方略を作れない状態に陥るのです。これらは無秩序型アタッチメントと言われています。

年齢があがると、怖い状況を避けるために子ども自身が、親の世話を焼いたり、何もできない親に子どもがあれこれと指図したりするようになることがあります。本来、子どもは親にその気持ちを受け止めてもらいたい関係でありながら、子どもが自分の心配や不安を後回しにして大人の気持ちの手当てをする役割を担っている状態は、親子の役割逆転です。子ども自身の不安が解消されないままになるという意味からも深刻な問題です。

子どもにとって、小さなうちに大人との安心できる関係が作られ、安心感の輪が出来ていると良い事がたくさんあります。アタッチメントについて時間をかけた追跡研究がされています。その代表としてミネソタ縦断研究というものがあります。経済的貧困層として生まれた180人の子どもについて、母親の妊娠時代から子どもが大人になるまで追跡した研究です。望んだ妊娠であったのか、婚姻状況、学歴や就労状況、収入、出産状況や生まれた子どもの健康状態などの調査から始まり、子どもが1歳になるとアタッチメントの質を調べました。その後、幼稚園での先生や友達との関係、学校での学力、思春期の心の育ちやその後の結婚、出産、そして子育てまで追跡して研究されました。

この研究を通して、子どもが小さい頃のアタッチメントの大切さが裏付けられました。第1に、周りの人間とのつながりを実感できるということです。自分が興味を持っていることや思ったり考えたりしていることに、大人が関心を持って見守ってくれていたという体験が、自分はひとりではないという、基本的な信頼関係を育む力につながります。第2に、自分や他人にプラスの期待が持てるようになります。私たちは、過去に、自分が経験したことから、今の出来事を予測し、人との関係の中で、こういう時はこうなるだろうとい

う予測（内的ワーキングモデル）をするようになることで対人関係の取り方を判断しています。これは身体で覚える記憶で、どんな予測を自分が持っているかを自覚することは難しいですが、誰もが持っている記憶です。安心感をたくさんもらった経験からは、プラスの期待を持つことができます。子育て支援の場面などで、人に頼る経験をしたことがない保護者はこちらとの関係を拒否されることがありますが、人に頼れば応えてもらえるという期待を持ちにくい経験をしてきたのかもしれない。困った時に、人にどのような期待を持てるのか、小さい頃の大人との安心できる関係で大きく違ってきます。第3に、自分の感情を整える力が育まれます。そうした力は生まれつき持つものでもなく、勝手に育つものでもありません。人の感情は生理的な反応（ドキドキする、ざわざわする、手に汗をかく、緊張が緩むなど）として先に表れます。そこで、子どもに大人が言葉を添えてくれる（ビックリしたね、うれしいね、嫌だったね、悲しかったね、など）ことで、その感情と言葉が合致します。これを気持ちに名前が付くといいます。子どもは大人に気持ちをなぞってもらうことで、自分のその時の気持ちを知り、またその気持ちは人と共有できることを知ります。例えばおもちゃの取り合いの場面で、手が出てしまった時、子どもは大人に気持ちをいろいろ聞いてもらい、言葉にしてもらって名前が付くことで、高ぶっていた思いが落ち着きます。大人がこのような気持ちとの付き合い方を一緒に考えることが、子どもにとって気持ちを整えていく経験につながります。大人に気持ちを整えてもらうことを積み重ねながら、段々と子どもは自分で気持ちを整えていけるようになります。大人は、子どもの日々味わっている喜怒哀楽に寄り添うことを意識的に行い、気持ちを推測して言葉をかけることをたくさんしてください。うれしかったね、嫌だったね、たのしかったね、不安だね、などの言葉をかけることを積み重ねることで、子どもは感情を知り、そして自ら整える力をつけていきます。これに関しては、自分で気持ちが整えられるようになりましてということがゴールではなく、子どもだけでなく、大人も自分の手に負えない不

安や心配など、困った時に誰かに気持ちを整えてもらう助けを期待できるということは生涯大切なことです。

3. アタッチメントの問題への支援

基本的な考え方としては、子どもにとって、自分では手に負えないような不安や恐怖を大人に守ってもらうことがアタッチメントの本質です。子どもの不安を落ち着かせる責任は大人にあります。まずは子どもにとって安心感のコップを満たしてくれるような大人が居る状況をどう作るかです。もし、子どもにアタッチメントの問題が起こっているならば、まずは普段関わる大人（養育者）が少しでも子どもの求めていることに応じるようにします。しかし、この場合、親も生育史の中で辛い体験をしていたり、親自身が不安なことも多いです。その場合は、子どものためにも、親自身を支えることが必要になります。親が変わろうとしている間も子どもは成長しますので、複数の養育者が子どもに応答的に関わる環境も大切です。養育者が親でなければという考えではなく、いつもの養育者がおり、いつもの環境（場所、生活の流れ、仲間など）があるということや、今ある環境の中で、子どもが自分の気持ちを出し、十分受け止めてもらえることが大切であるといえます。

しかし、私たちが、不健全なアタッチメントを身につけた子どもに対して応答的に関わるのは特有の難しさがあります。大人が一生懸命関わっても子どもから何も手応えが返ってこなかったり、更に、子どもが真直ぐに思いを出さず、大人もどう応えれば良いのか分からない状況が続いたりすると、大人も自信を無くしたり疲れたりするでしょう。大人が根気よく子どもに接するためにも、なぜ子どもがこのような表現をするのかを一緒に考え、大人自身もしんどさや辛さに共感してもらうための安心基地が必要になり、職場内や同僚間、外部からのスーパービジョンを受けながら大人も支えられていくことが大事になります。健全なアタッチメントの形成に必要な養育者の関わりとして、敏感な養育行動が発達の研究で分かっています。敏感な養育行動とは子どものシグ

ナルにすぐに気付く、早く正しく応じる養育行動のことです。「正しく」といっても、親が子のシグナルから求めている通りに応じる割合は3割で良いと言われています。実はこれくらいで十分で、子どもは、思いが違っていれば再びサインを出すので、それに応じればいいのです。ああかな、こうかな、そうかこれだったのかと大人が子どもの思いを探りながら、3割くらいの確率で子どもの求めているものにたどりつけば、子どもは分かってもらえていると実感できます。このように、ほどほどであることが良いことを、ウイニコット（児童精神科医）は「ほどよい養育」と言っています。私たちも人間関係の中で、自分の思っていること全てが相手に伝わることはありませんし、逆に、違う時に違うと言った時、そうだったのと応じてもらえることの方が重要です。応じる行動（泣いている子どもを抱き上げるなど）だけが大切でなく、ああかな、こうかなと子どもの気持ちに思いをはせ（内省能力）、子どもの欲求や気持ちを分かろうとすること、それからそれに応じていくことが大事です。

先述の安心感の輪を思い出してください。子どもの安心基地になるためには、まずは、子どもが今、安心感の輪の何処にいるのかを確かめます。安心していれば探索を応援し、不安そうな様子であればまずは安心感を与えることが一番必要な対応になります。時々、アタッチメントはスキンシップだと誤解されていることがあります。不安な子どもに安心感を与えるのがアタッチメントですが、その目的の為に抱っこという方法は幼い子どもには有効です。しかし、同時に気持ちに添った言葉かけを行うことが大切で、アタッチメント＝スキンシップではありません。抱っこ以上に、不安な気持ちに寄り添い、その気持ちに寄り添った言葉かけが重要なのです。そして、年齢が上れば、気持ちに添った言葉かけの方が重要になってきます。しかし、理屈は簡単ですが、これを実行することは困難です。ビデオを用いて親子の行動観察をすると、親のかける言葉で子どもの泣き声が変わることが分かることがあります。日本の親に多い例ですが、まずは、泣いている子どもを抱きあげますが、次の瞬間には、親は気を逸らすよう

な関わりをすることがよく見受けられます。理由としては、可哀想で早く泣き止ませてあげたかったとお話くださったお母様もおられました。実は泣いている子どもの気持ちに寄り添って「感情のコップ」を満たした方が、子どもは早く大丈夫になるのです。泣きたい気持ちを受け止めてもらえると、子どもが自ら安心して泣き止み探索に向かい始めます。大人のかける言葉が子どもの気持ちに添った時、泣き声のボリュームが下ることもよくあることです。まずはしっかりと気持ちに寄り添うことが大切であることがこの様子からも分かります。

アタッチメント信号をまっすぐに出しにくくなった子どもに対しては、まず、子ども自身の本当の気持ちや欲求を伝えてもいいと思えるような体験を重ねることが大切です。子どもの気持ちの背後にある本当の欲求を、大人が推察して手を差し伸べます。方法として、例えば、怪我をしても泣かず平気そうにしている子どもの気持ちを大人が推測し、「痛かったでしょう」と言って関わります。初めはそれに反応をしない子どももいます。なぜなら、子どもが今までは泣かないように言われ、そうした方がよいと思って大人に感じてきたからで、行動が修正されるには一定の時間が必要になりますが、これを根気よく続け、子どもが本当の気持ちや欲求を伝えていいと思える体験をすることが必要です。

アタッチメントの歴史を調べた研究に、人は小さい時に養育者とのアタッチメントで上手い出来ない体験をしても、人生のどこかで自分に真剣に向き合ってくれる大人に出会うと良いアタッチメントに修正されるという報告があります。今、自分が関わっている子どもとの関係で、このような役割を果たすこともあるということを覚えておいてください。

4. サークルオブセキュリティについて

サークルオブセキュリティ（Circle of Security, 以下COSという）とは「安心感の輪」という意味です。先述の「安心感の輪」の図も、このプログラムの開発者が作ったものです。アメリカでは以前から犯罪などの問題が深刻で、対策

が早くから必要になってきた背景があります。国が試算した結果、乳幼児にこそ手厚く支援をすると、子どもたちが社会に貢献する人に成長し、また、これは経済的な試算からも、子どもが乳幼児の時期から支援をした方が良いという結果が出ています。その中でも特に貧困、ひとり親、若年層の親たちにはいろいろな取組がされており、親子関係支援の一つとしてCOSプログラムが開発されました。親たちが、我が子が求めていることについて、子どもの様子のビデオを見て話し合います。その際、漠然とビデオを見るのではなく、安心感の輪という視点を親達と共有し、この点に注目して見るようにします。アタッチメント改善を目的として、子どもの欲求や気持ちが分かることと、それに親が応じることを学びます。

プログラムを始めるにあたり、最初に親子のアセスメントの為の観察をします。方法は、子どもが知らない場所で一人になる場面を作り、そこでアタッチメントの様子を観察しながら、親子にとって上手くいっていることや課題であることを見つけます。課題には原因があり、親の状況や、生育史なども尋ねながら参考にします。次に親子に目標を立て、親の良い関わりについては更に良くなるように、また課題については乗り越えていけるように導きます。支援者が親の為の安心基地になることも大切です。

親が子どもの気持ちを分かろうとする内省能力が子どものアタッチメントに大切ですが、それが難しい状態には2種類あります。子どもの気持ちに関心を持たない場合と、自分を困らせようとしているなどゆがんだ読み取りをしている場合です。しかし、正誤を親と議論することは効果的ではありません。まずはビデオを用いて行動観察をし、子どもはその瞬間何をしていたのか、そして安心感の輪の何処にいるのか、子どもの気持ちや欲求は何か、という順で探ります。このような過程を繰り返すことで子どもの思いを捉える親の視点が変わると、親自身も変わることが出来ます。私たちが親と一緒にアタッチメントの視点を持ちながら子どもの行動を観察することが、親が子どもの気持ちを理解しようとするにつながります。私たちは親を支援する上での重要な役

割を担っているのです。

一方で、親が子どもの気持ちや欲求が理解出来るようになって、親自身が感情的になっていつもの対応を繰り返したり、子どものアタッチメント欲求に応えられなかったりすることもあります。たとえば、親自身も今まで泣き言が言いたくても我慢し頑張ってきた背景があり、そこで子どもが泣き言を言うことが受け入れられず、気持ちが落ち着かなくなることがあります。このような場合、わかっているけどできない親の背景を理解する支援が必要です。どの親も、子どもが様々な向けてくる欲求には、冷静に対応しやすい欲求とつい感情的になってしまう欲求があります。親自身の落ち着かない気持ちが調整されることが、子どもの視点に立てる余裕につながります。

COSプログラムを簡単にした「安心感の輪子育てプログラム」では個々のビデオ撮影はせずに心理教育DVDを使って典型的な親子の例を見ながら、自分たちの場合を話し合います。全8回あり、安心感の輪を使って子どもの様々な欲求を推測する練習をし、子どもに寄り添うことを学びます。後半は自分自身のことについても考えます。そして子どもと上手くいかない時の修復方法について考えていきます。このプログラムは「ほどよい」ことが強調されていて、子育てが上手く出来ないと不安になる人が多くいますが、程々が良いことや、間違えることがあっても良いと伝えていきます。また、何事も遅すぎることはないのです、いつでも今までと違った子育てを学ぶことは良いことだと伝えます。小さい頃のアタッチメントがその後の発達に大切ですが、良い方向に変わる可能性はいつでもあり、人生のどこかで、自分に真剣に関わってくれる人に出会う経験や、また親となった時に子どもとの関係に悩み、助けを求める場合、できていることは認めてもらい、上手くいかない理由を一緒に考えてサポートしてくれる人に出会い、困った時に助けてもらえることで結果として親と子どもとの良好な関係が作れます。親子関係支援は子どものためでありながらも、親が変わるチャンスでもあるのです。子どもと関わる私たちの仕事は、つい子ども目線になり、親の行動を責めたいということもあります。

が、親にも背景があり、子どもとの関係の中から親が変わっていくことが大事で、それを支えていく大人が必要です。その子どもに縁があって関わっている全ての大人は、結果として子どもにとって大事な大人なのです。

今日ここで学んだ視点が普段の仕事の中でどう活かしていけるのかを各職場に持ち帰って是非、話し合いをしていただきたいと思います。

5. 終わりに

園（所）には、アタッチメント不足で大人を求めてくる子どもがいます。家庭で安心感を満たしてもらっている子どもは、いろいろな活動に向かっていけますが、そうでない子はまずは先生との間で安心感を満たしてほしいと求めてきます。やはり、アタッチメントは優先順位のとても高い欲求なので、落ち着かない気持ちを整えてほしいという子どもの気持ちを満たすことが先決であるといえます。

この大事な欲求を集団の中で満たすことは難しいことですので、どこでも悩まれていると思います。けれども、職場全体で安心感の輪を使って子どもを見ることで、子どもを見る視点が変わります。安心感の輪を基準にして子どもの状態を捉え、お互い声を掛け合いながら対応できるようにもなります。支援者を支える支援として、この安心感の輪の視点が皆さんの職場において大事な視点の一つになればと思います。

今日の講義全般は何となく知っていて、皆さんの中で普段していることをやはり大切にしていくなのだと納得されているのではないのでしょうか。この講義が、すぐに手応えが出なくてもそれが大事であると思い直せるような機会になればと思います。理論では分かってもそれを実践につなげることは簡単ではありません。理論を学んだ後、各園（所）でアタッチメントの視点で事例検討会などを繰り返し行い、保育を見直してください。親子への対応に困っていた事で、やはりこの方法で良かったと思うことも多くあり、励まされたという事も多く、今後も各職場でこの視点を是非活かして欲しいと思います。